Osaka University Knowledge Archive

Title	マンガ、アニメから文明論まで ： 哲学の実験グループ・比較文明学研究室の紹介
Author(s)	野尻, 英一
Citation	生産と技術. 2021, 73(2), p. 86-91
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84806
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

マンガ、アニメから文明論まで
～哲学の実験グループ･比較文明学研究室の紹介～

研究室紹介

野　尻　英　一*

From Manga & Anime to Theory of Civilizations

Key Words：Philosophy, Social Theory, Psychoanalysis, Cultural Studies, Theory of Civilizations

はじめに～哲学の実験グループとは～

吹田キャンパスの人間科学部には「現代人間学グループ」というセクションがある。四人の哲学者が哲学の最先端領域の研究を行なっており、担当領域としては、村上靖彦教授（哲学と質的研究）、檜垣立哉教授（フランス現代思想）、森田邦久准教授（科学哲学・分析哲学）、そして私、野尻英一（比較文明学）という布陣になっている。人文系の慣例で一人ひとりが独立した研究室を運営する体制だが、研究指導はグループ単位で協力して行なっている。しかし人間科学部に哲学の先端的応用研究のセクションがあると言っても、なかなかわかりにくい話で、認知がいまひとつなので、このたび「哲学の実験グループ」と名前をあらため、グループとしての活動をリニューアルすることとした。TwitterやYoutubeなどのメディアも活用して、社会へのアウトリーチも組み込んだ活動を展開していきたいと構想中である[1)]。

比較文明学研究室で行なっていること

私、野尻は、上記「哲学の実験グループ」で「比較文明学研究室」を運営している[2)]。哲学／倫理学、社会理論、精神分析、表象文化論にまたがった研究・教育分野を担当している。カント、ヘーゲルなど近代の哲学者からジャック・デリダ、スラヴォイ・ジジェクなど現代の哲学者・思想家についての研究、現代的なマルクス経済学やグローバリゼーションやナショナリズムについての分析を含む社会理論、ジャック・ラカンを中心とする精神分析／精神病理学、マンガやアニメ、ゲーム、それからやおいやBLなどの現代の文化事象を扱う表象文化論までをカバーする。さらには発達障害（とくに自閉症スペクトラム障害）やニューロダイバーシティについての哲学的考察も手がけ、社学連携のプロジェクトも展開している[3)]。このように述べると、非常に多様な対象を研究するように見えて、カオスのようにも見えるかもしれないが、私自身はいつも一つのことを追求していると思っている。一つのことを徹底して追求するためには、多くのことを学びつなげていく必要がある、そういうことに結局はなる。その一つのこととは、文明論的な視点に立った人間存在についての探求（人間とは何か）である。

現代の日本人は、西洋近代化された社会に生きている。もともと自分たちで作ったのではない文明の形式を外部から導入して、新しい文明の形をつくったとも言える。内発的な文明化、近代化ではなくて、外発的な変化である。夏目漱石はそのことを上滑りの開化（文明化）と呼んだ。この中で、私たちの「心」はどのように変化するのか。言ってみれば、明治開化以後、日本人が生み出した文明、文化、思想は、おそらく日常の思考のレベルまで含めて、この外発的な変化に適応するために分泌された生成物だということになるだろう。日本という土地で哲学をすることは、結局はこの問題にいきあたる。もちろん現代のグローバリゼーションの運動の中では、世界中の国・地域が西洋近代化の波にさらされている。日本という国は、非西欧地域で他に先駆けて近代化し、成熟し、いまは成熟後の社会と心の変化を経験しつつある。だからこそ日本という土地は、文

* Eiichi NOJIRI
1970年生まれ
早稲田大学大学院　社会科学研究科　地球社会論専攻博士後期課程（2004年）
現在、大阪大学大学院　人間科学研究科　基礎人間科学講座　准教授　博士（学術）
TEL：06-6879-8093
E-mail：nojiri@hus.osaka-u.ac.jp

明論を論ずるのに適しているし、先行的なモデルを示すこともできる。福澤諭吉、夏目漱石から梅棹忠夫まで文明を論じる伝統があるのはそのためである。実は「文明論」という言葉が、そもそも欧米にはない。英語に翻訳するときは、いつも表現を探さなくてはならない。一つの文明が他地域に進出していく、それに襲われ浸透されていく私たちという問題意識そのものが、優れて日本的なものだったと言える。

フランクフルト学派の批判理論の継承

しかしそうは言っても、欧米に学問的なモデルに相当するものがないわけではない。ただし「文明論」という言葉は使われず、批判理論や社会理論と呼ばれる。西洋近代化は、そのコアに経済様式として資本主義経済を擁する。西洋文明、西洋の学問のすごいところは、自分たちの文明の様式を批判する理論をも内発的に生み出してしまうところである。（したがって文明論に適した土壌は日本にあるが、それにもかかわらず優れた学問的モデルは欧米にある。）資本主義経済の様式を内部から批判したのは、マルクスである。その資本主義批判を受け継ぎつつ、資本主義に浸透された社会における人間の心や文化のあり方の変化を捉えようとしたのが、二〇世紀のフランクフルト学派と呼ばれる学術グループである。アドルノ、ホルクハイマー、ベンヤミン、フロム、マルクーゼ、ハーバーマスといった思想家が有名である。フランクフルト学派は、ヘーゲルの哲学、マルクスの社会理論、フロイトの精神分析、そして文化理論を組み合わせ、資本主義化された社会に生きる人間がどのような精神の営みを行なっていくことになるのか、私たちの生きること、働くこと、消費すること、文化を楽しむこと、コミュニケーションすることのかたちの変化を理論的に論じた。一九七〇年代以降、現代哲学の大きな潮流の一つとして、日本の思想界にも影響を与えた。

大阪大学人間科学部の比較文明学研究室は、徳永恂教授（初代）、三島憲一教授（二代目）と、日本におけるフランクフルト学派研究の拠点を担った。またヴォルフガング・シュヴェントカー教授（三代目）は、マックス・ウェーバーの日本における受容を研究し、やはり資本主義という文明のかたちが日本に及ぼした影響を対象とした。フランクフルト学派をお手本とし、それを新しいパーツで組み直すこと、四代目に研究室を継承した私のやっていることはそのように表現することもできる。フランクフルト学派の理論を構成したパーツである哲学、社会理論、精神分析、文化理論の一つひとつの内容は古くなってしまっている。しかし彼らの文明論的な哲学という問題意識は現代でも妥当である。そこで現代的なヘーゲル解釈、現代的なマルクス社会理論、フロイトの後継者ラカンの精神分析理論、現代表象文化論の方法を組み合わせ、現代版に更新した営みを行なう。フランクフルト学派の一番の功績は、哲学、社会理論、精神分析、文化理論が境界なく融合し得ること、現代においては融合しなければならないことを示した点にある。学際的な社会／人間研究の先駆的モデルである。そしてこの精神は、欧米における人文系の研究の最先端ではさらに追求されており、今日のテリー・イーグルトン、フレドリック・ジェイムソン、スラヴォイ・ジジェクといった思想家たちの営みに継承されている。イーグルトンは『文学とは何か』において、文学、思想、社会、歴史の研究はもはや区分はできず、一つになることが必然であることを理論的に示している。ただ日本ではそういう流れが見えにくい。日本の哲学研究は、人物別の文献研究のスタイルに特化する傾向があり、いわゆる現代思想と呼ばれる分野でさえ、初めはそうではなかったのに人物文献研究と化していく。特定の人物の特定の文献を緻密に研究するというスタイルだと業績を作りやすいためにそうなってしまうのだが、そもそも哲学とは問題、主題、テーマそのものを自己の哲学力で追求していくことである。そのためにあらゆる学問の手法と成果を使う。「哲学の実験グループ」とは、その精神を表した名称にほかならない。

シン・ゴジラ、進撃の巨人、私たちの忘れた真実

現代文明の構造を理解するには、①われわれの倫理観や文化表象の示す特性という〈主観〉の次元から入るアプローチと、②社会･歴史の構造という〈客観〉の次元から入るアプローチの二つがある。比較文明学研究室は双方に対応する科目を提供している。①②は相補的な内容で、いわば表裏一体と言えるが、特に①のアプローチに独自性があると考えている。つまり文化事象から私たちの生きている社会、歴史、

庵野秀明・樋口真嗣監督
『シン・ゴジラ』2016 年

文明の状況についての認識を深めていくという手法である。さらにわかりやすく言えば、現代日本社会において生産され消費される物語表象、たとえば『シン・ゴジラ』『進撃の巨人』『鬼滅の刃』といった作品から、私たちがどういう時代や社会の構造の中を生きているのかを捉える、ということである。

フレドリック・ジェイムソンは、文化作品における象徴を「現実界の水準で私たちが経験している解決不可能な矛盾に対する想像的な解決」として解析することができると述べている。つまり私たちがどのような物語を生み出すかを見ることによって、私たちが社会構造の深層レベルでどのような矛盾を経験しているかを捉えることができるというわけである。たとえば映画『シン・ゴジラ』（庵野秀明・樋口真嗣監督、2016 年）では、日本社会が危機に面したときに、突如使命感に「目覚め」、日本を救うために立ち上がる若き官僚・政治家たちの活躍が描かれる。こうした物語構造は、戦後日本の文学においてはSF 作家の小松左京が得意とした手法だった（「地には平和を」『日本沈没』『首都消失』など）。日本喪失の危機を想定することで「日本」というものを捉え直そうとする欲望がそこには見られる。敗北する太平洋戦争という歴史的事件の構造を、そのさなかにあってむしろ把握できず、陸海軍も政治家も官僚も企業も国民もついに「目覚める」ことなく終わってしまったことへの後悔。もしそれを先取りできていたら、あるいは今度こそ先取りできないか、と夢想する空想力が、こうした日本列島の危機と、目覚めてそれに立ち向かう日本人たち、というフィクションを生みだす。つまりそれは〈目覚めることへの夢想〉だと言えるだろう。『シン・ゴジラ』の作り手と受け手とが生産し消費する白昼夢は、私たちの無意識的な経験を反映している。

『進撃の巨人』（諫山創、2009 年～）は世界的にヒットしている作品だが、その設定やプロットは、精神分析的にも文明論的にも興味深い。平和な日常を送る生活に、ある日突如として、圧倒的な恐怖をもたらす存在である「巨人」が襲撃してくるという物語。それはかつて経験され、そのために巨大な壁が作られ、その中で平穏な日常を享受する人間たちが忘れていた、世界の「真実」の襲来だった、というストーリーである。

諫山創『進撃の巨人』
2009 年～

私たちは何か大事なことを忘れてしまっている、こうした記憶（喪失）感覚やデジャヴ感覚を素材とした物語が、2000 年代以降、顕著に増えていることに気付いている人は、いるだろうか。2000～2010 年代には、時間ループ物語タイプの作品が多くヒットした（代表例は『STEINS;GATE』や『魔法少女まどか☆マギカ』）が、それもこの一類型と言える。『進撃の巨人』のように、「壁」の中に暮らし平穏な暮らしに閉じこもっていたが、その外には人間が忘れていた真実があった、というタイプもある。今期アニメ化中の『約束のネバーランド』もこれに類する。SF 作品の歴史を見れば、古典的な手法とも言える（アーサー・C・クラーク『都市と星』［1956 年］が一つの元型）が、私は小学生の頃に人類が失われた記憶を取り戻すというこのタイプの物語にとても魅かれた経験がある（小学校の図書館にジョン・クリストファーの『鋼鉄の巨人』という作品があり夢中になった）。後にそもそも哲学の始まりがそうだったことを知った。プラトンの「想起説」である。人間は世界の真実を知っていたが、そのことを忘れてしまった。だから人間は真実を求めて探求を行なう種族なのだ、というストーリーである。これが西欧形而上学の開始点にあるのだから、じつは『進撃の巨人』にしろ『約束のネバーランド』にしろ、哲学的感覚と深いつながりがあると言ってしまっていい。

重要なことは、「記憶」と「真実」との不思議な関係はかつて一部の哲学者だけが追求していたもの

だったが、現代の発達した資本主義社会である日本では、一般の人々がその不思議感覚を広く経験するようになっているということだ。精神分析的には「適応的解離」の一般化とでも呼び得るこの状態の文明論的な構造を、私は解こうとしている。「構想力と文明プロジェクト」と名付けた、10年計画である。高度経済成長期には時間性として未来のビジョン構築に向けられ発達させられた私たちの想像力が、経済成長が飽和するにつれて時間性の構造から接続解除されることで遊離する。それがバブル世代、団塊ジュニア世代には時間感覚の擾乱タイプの物語（時間ループ物語）が魅力的に見えること、Z世代の子供たちにとっての夢の象徴タイプが『ドラえもん』から『ポケットモンスター』へというかたちで時間的ユートピア性から空間的ユートピア性へと変化することなどの現象に現れていると言えるだろう。たとえば「壁」の向こうの私たちが忘れていた真実とは、もしかしたら、日米安全保障条約による軍事的な対米従属構造の中で戦前の大日本帝国のアジア進出の過去を忘れ、国民経済の維持とサブカルチャーの白昼夢と身近な人たちとの親密な関係性の中に埋没しようとする日本人が遠くに聞いている、国際社会が扉を叩く音なのかもしれない。文明論的な変動が旧来の共同体に変容を迫るとき、それは忘れ去られていた真理、抑圧されていた現実として、たとえば忘れられていた「巨人」の襲来というかたちで表現されるのかも知れない。

興味深いのはノーベル文学賞を受賞した作家カズオ・イシグロが『忘れられた巨人』（2015年）という作品で、高度に文学的な手法でこの文明論的な意識変容の経験を表現しているのだが、諫山創『進撃の巨人』はそれをサブカルチャーの形式で先取りしているという事実だ。マンガ、アニメなど日本のサブカルチャー分野は産業としての厚みから、優れた才能が集まっている。日本独特の感覚を表現しているように見えながら、それが世界的なヒットを獲得する作品を生み出すことから、ある種、世界的な文明論的変容を鋭敏に捉えるアンテナを備えた、先端的な実験室空間となっているのでないか。だからこそそこにおける表象を読み解くことで、グローバルな意識変容の兆候を捉えることも可能になってくるわけだ。

鬼滅の刃、私たちは何を大事だと思っているのか

吾峠呼世晴『鬼滅の刃』2020年

『鬼滅の刃』（吾峠呼世晴、2020年）は、コロナ渦が世界中を襲った年に日本社会における巨大ヒット作品となった。これも興味深い。この作品の構造は、「鬼」という人間に優越した能力を持ち、特定条件下（日光に当たらない）でほぼ永遠の個体的生命を誇る他者的存在に対して、生身の人間たちがそれを滅ぼすべく戦う物語である。人間たちは過酷な鍛練で鬼と戦う能力を高めようとするが、どうやっても鬼と比較して圧倒的に脆く弱い。その人間が最後には、ほぼ完全無欠の生命体と言え、1000年以上も生きてきた鬼の首領、鬼舞辻無惨を倒す。弱く脆い人間たちを支えたのは、鬼に殺されたわが親、わが子供、わが兄弟たちへの想い、仲間たちへの想いであり、最終的な武器となったのは、なんと祖先から伝来された演舞のかたちという「文化」と、祖先から遺伝された「記憶」である。主人公の竈門炭治郎は絶対的な他者である鬼舞辻無惨に対して「オレはお前を絶対に許さない！」と叫ぶ。主人公たちのリーダー産屋敷耀哉は鬼に対して「永遠というのは人の想いだ 人の想いこそが永遠であり 不滅なんだよ」と言い、記憶と想いを継承していく人間の勝利を宣言する。ここで描かれているのは、個体的に不滅不死の究極生物に対して、死にゆく人間たちの「集合的記憶」が勝利するという物語である。

2020年10月に公開された『劇場版 鬼滅の刃 無限列車編』は驚異的な勢いで観客動員数を伸ばし、12月までに『千と千尋の神隠し』の記録を超えて国内歴代興行収入1位を達成したという。私も観賞したが、物理的に圧倒的な強さを誇る鬼に対して、親密な人たちとの記憶と想いの絆をよりどころに主人公たちが立ち向かっていくストーリーは感動的だ。思わず涙を誘われる。と同時に、私はそういうときでも癖で文明論的に分析してしまう。多くの評論家が指摘しているように『鬼滅の刃』は、物語の構成

や手法に、ほぼ新しいところがない。読みやすく、面白く、よく構成された作品だが、新奇性は薄い。難解な作家性の表現された作品ではないところが、国民的なヒットとなる理由でもある。だからこそ注目すべきは、なぜいまこの作品が日本社会においてヒットするのか、ということだ。鬼という異質な生態を持つ他者（しかしすべての鬼はかつて人間だった）と戦わなければならないという使命感、鬼と戦うことによって守るべきものがあるというメッセージ、そして私たちのよりどころとなり最大の武器となるのは祖先から受け継いできた文化と記憶だという主張、そして取り戻される、家族や仲間たちとの親密で平和な日常生活。

ここに無意識的に表現されているものは、20世紀の国家資本主義的体制のもとでここ100年ほど維持されてきた国民経済／国民生活の一体性と、グローバリゼーションにそれが曝されて変容していくことの感知ではないか。人間が生きている間にこれだけ大きな社会経済体制の変動を経験するようになったのは、最近のことだ。したがって私たちの意識は、その変化を否認しようとする。不思議なことではない。今後日本の経済・社会・文化は移民労働力の受容によって大きな変容を経験するだろう。そしてじつはすでにそれは始まっている。偶然ではあるが、このタイミングでコロナ渦に襲われることによって、日本社会が経験しつつあった文明論的な変容経験は多くの人にとってむきだしになりつつある。もちろん現状は直接的にはウィルスのせいなのだが、感染症の流行とて文明の所産であることは指摘されている（ジャレド・ダイアモンド『銃・病原菌・鉄』）。

私たちの意識は否認しようとも、身体は変容を経験しつつある。その構造的な矛盾の表現が、表象文化には現れる。私たちが経験している矛盾を図像と物語のかたちで表現しているからこそ、作品は魅力的なのだ。作品は私たちに、私たちの〈経験〉を「経験」させるのである。

自閉症と定型発達文明論

最後に、発達障害の一種であるとされ、ここ20年ほどの間に先進国を中心に急速に注目されるようになった自閉症スペクトラム障害（ASD）、いわゆる「自閉症」についての研究にも言及しておこう。

当研究室の自閉症への注目は独特であり、おそらく世界的にも稀である。それは、自閉症を文明論的な視点で考察しようとしているからである。自閉症は、今日の自然科学、医療分野の研究からは遺伝的な機序による発症と考えられている。したがって自閉症は以前から人類社会にあったものである。しかし自閉症が注目されるようになったのは、ここ数十年のスパンでのことに過ぎない。ある症状が症状として顕在化する背景には、その症状そのものの物理的な存在に加えて、社会環境要因がある。つまり社会がそれを病／障害と認知するから、それが病／障害であるということがある。特に精神障害、精神疾患の場合には、精神という目に見えないものが対象となるだけに、その傾向は強い。

自閉症の場合には、社会的コミュニケーションの能力や常同行動の面で、通常とは異なる特徴を示す。人間関係が不得意である代わりに、体系的なデータを覚えることが得意であったり、繰り返し作業に適性があったりする。こうした傾向が、現在の社会が定めた医学的な基準によって、「障害」と診断される。しかしかつての社会では、自閉症者の示す症状は、現在ほど問題にはなっていなかったと考えられる。対人関係が苦手でも、路線図と運賃表を丸暗記していて特定の駅までの交通費を一瞬で計算してくれる能力があったり、経理の細かい計算を職人的にこなしてくれたり、そういうかたちで職場に居場所があった、たとえば、こういうことだったと思われる。職場や近所のつきあい、家族、親族の付き合いも、いまほどデリケートな心遣いを要求されなかったし、他者の心の裡を忖度して振る舞う圧力もいまほど大きくなかった。『男はつらいよ』などの映画を見直してみればわかるとおり、昭和期の日本人は不器用にぶつかりあって、ケンカばかりしていた。日本の社会が経済成長を経て、高度資本主義社会に突入し、脱工業化するにつれて、仕事、人間関係における対人コミュニケーション能力の重要度が高まった。それがおよそ2、30年前から急速に進んだ変化である。「コミュ力」ということが盛んに唱えられるようになり、他人の心を繊細に察することの重要性が社会のあらゆる局面で高まった。こうした社会的な背景が「自閉症」という症状が注目されるようになった一因であると考えられる。だからそれはやはり文明論的な変容と関わりがある。

私がいま対象化しようとしているのは、そういう背景的な構造の中で注目される「自閉症」という症状の理解から反転し、「定型発達」、つまり自閉症と診断されないマジョリティの人間の想像力の独特な質とかたちである。他者の心とつながりあうことができる、と確信できる定型発達の想像力の特殊的な働きこそが、資本主義経済の動因を形成している。精神分析の表現を使えば、私たちは他人の欲望を欲望している。人に認められたい、人並みの生活がしたい、人の欲しいものが欲しい、こうした相互に共振し増幅しあう欲望の性質から現代文明のダイナミズムが生じている。自然環境を消費しながら交換価値を無限に生みだす経済の運動を駆動しているものもそれだ。「定型発達文明」という呼称でそれを対象化し、そのメカニズムとモード変化を理論化しようとしている。これも「構想力と文明プロジェクト」の一環である。

注

1）哲学の実験グループ Twitter アカウント
https://twitter.com/experimentphilo

2）比較文明学研究室ホームページ
http://csc.hus.osaka-u.ac.jp/index.html

3）自閉症学超会議！プロジェクト
http://csc.hus.osaka-u.ac.jp/jiheishougaku-chou-kaigi/